

河村さんが難井沢で亡くなったと聞いて、彫刻家のM氏は取るものもとらず、東京から急行したが、駅へつくとしのつくような大雨で、本人も命からがらの思いで先方に着いたそうです。

聞けば亡くなる日にも入浴して猫のスケッチをしていたらしいが、如何にも河村さん坊主と線香が嫌いでお通夜も納棺も誠に妙事向の抜けたものだったらしいが、如何にも河村さんらしい往生だったとM氏は述懐していました。

学校時代の河村さんは愉快な尖端をゆくピエロ風な役割を果しながら、その寂しさを酒にまぎらわしている向きもありました。その間の奇行、例えば夫人同伴で自転車をかり、「東海道飛車栗毛」と囂って画行脚をし、はなばなしいニューストピックの種を播いたりしてアツと世間を驚かせたことなども多々ありました。

併しこうした恬淡洒脱な性格のかげで、彼のたくましいデシナトルとしての卓抜な才能が發揮されると同時に、次代の沈潜した龍興への反動が已に培われていたことを見逃がしてはならぬと思います。

彼の初期の機智にあふれた「目呂二人形」、漫画、隨筆に接する場合と、あの晩年のすみ切った、明るさと、靜かな空間造型による俳画などを見ると、一人の人間の探究と精進は、執心にも似た恐しさをさえ示している程厳しいものであります。

私は彼程自然を愛した人を知りません。冬の山を描きたい為には、五十の坂を越してスキーを始めたそうです。彼の物した背だけにあまる写生帖には禽獸、草木が躍動し、彼自体の驚きと喜びに変わっています。特に猫を愛した点では誰一人彼の足元へもよぶことは出来ないでしょう。猫をなで乍ら、その骨格をさぐり、彫刻意識を働かせていたと言います。

彼の遺稿とも言う可き友人關係についての種々な思い出、兄弟愛のこと、一人娘のソロさんを結婚させてから、東京と難井沢に別れ住んだ約二年間の、日々の身辺雜記などの絵入りの心情をこめた通信は驚異に値するものがあります。

無論彼の本領であった彫刻生活は、昭和六年以後の構造社、続いて日展無鑑査時代に手堅い作品を残しておりますが何とか選散しないように勉めたいものだと思います。

いずれにしてもこの度は、俳画と言う彼の一面を展覧することになりましたが、これを機会に河村龍興氏の芸術が再検討されることを心から祈つてやみません。